

地域活性化の動的な進展プロセスの評価の試み：鳥取県智頭町 「日本ゼロ分のイチ村おこし運動」に着目して

京都大学大学院工学研究科 学生会員 ○肥後 英志郎
北京外国語大学 孫 英英
京都大学防災研究所 正会員 岡田 憲夫

1. はじめに

本研究では、典型的な中山間地である鳥取県智頭町において 1997 年から 10 年間の事業として第Ⅰ期が始まり、現在は第Ⅱ期に入った「日本ゼロ分のイチ村おこし運動」という補助事業に着目する。これは 25 年前から地元住民が独自に始め、進展してきた「地域活性化運動」の流れの一部である。多くの実践知の上に成り立つ補助事業であり、近年の「地域活性化運動」の先駆けの一例であるといえる。またこれは「新たな公」のモデルケースとなりうる枠組みでもある。これにより新たな集落単位の自治組織が、生まれ成長していくダイナミックな過程を、既往記録書やフィールド調査の結果に基づいて多角的に分析することを目的とする。

2. 日本ゼロ分のイチ村おこし運動

「日本ゼロ分のイチ村おこし運動」は、集落や地区の住民自治を促すための町の支援事業である。この事業の下に設立された「集落振興協議会」(第Ⅰ期)は集落単位の新しい自治組織であり、「地区振興協議会」(第Ⅱ期)は 10 前後の集落を束ねる、旧村に相当する地区と呼ばれる地域単位の自治組織である。いずれも構成員は地域住民である。しかし後者は各集落の提携組織としての性格が強く、かつ地域在住の町役場職員を副会長に据えることとしているため、ただの自治組織ではなく、住民と町役場の協働的活動組織という性格が強い。さらに、アドバイザーに大学の教授や郵便局局長などを持ち、幅広い視野で地域の問題を捉えるシステムを持つ。

補助金は第Ⅰ期では、最初の 2 年間は 50 万円で、その後は 10 年目まで 25 万円ずつ、合計 300 万円である。第Ⅱ期はその倍の額が支給されている。ただしこの経費はソフト面にしか使えない。

3. 「出来事が地域の活性化に与える影響力」の指標化と分析

地域の活性化具合の変遷や取り組み能力の進展を可視化することで、地域の活動の進展プロセスの質的变化を捉えようと考えた。そこで一つの試みとして「人の活動に関する運動量」に着目し、「出来事の持つ影響力」の指標化とそれに基づいた定性的評価を行った。「出来事の持つ影響力」はその出来事の参加者の持つ「影響力」の足し算で評価できると考える。ここでは、「影響力」を個人のもつ「肩書き」で対応させ、人数を個々でカウントするのではなくグループ化して、その肩書きの人が「いない」・「いる」・「3人以上いる」という 3 段階に分けた。

その上で、得点化された活動を活動の達成度で 3 段階(「集まっただけ」「+決めた」「+実施した」)に区分した。

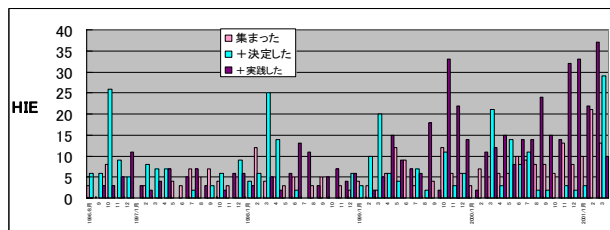


図.1 活動レベルごとの影響度

また、「単発の活動」と「繰り返されている活動」を区別した。活動が継続されると新鮮味は薄れるが、地域の活動として定着してきて、活動の持つ性質が変わってくると考えたからである。線引きとしては「5 回以上」を後者であるとした。

図.1～図.3 では智頭町の、ある集落での 10 年間のうちの約 5 年分を載せた。以上の定量化により地域の活動をマクロな視点で俯瞰できるようになった。地域の活動があるイベントを機に軌道に乗っていく様子、活動が活発化し次々に地域に定着していく様子、そして

キーワード 「新たな公」、鳥取県智頭町、地域活性化、枠組み形成、多層 CAPD サイクル、協働的發展

連絡先

〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄 京都大学防災研究所

TEL:0774-38-4038

10 年の終盤には疲れからか活動が鈍っていく様子などが視覚的にわかった。

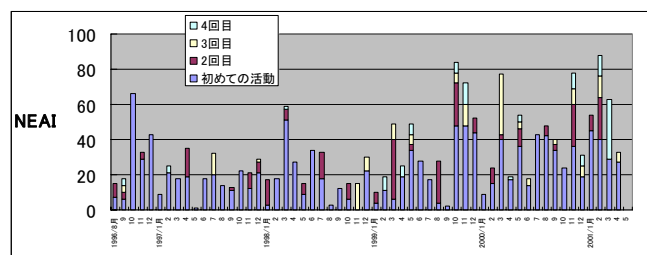


図.2 「単発の活動」についての定量化

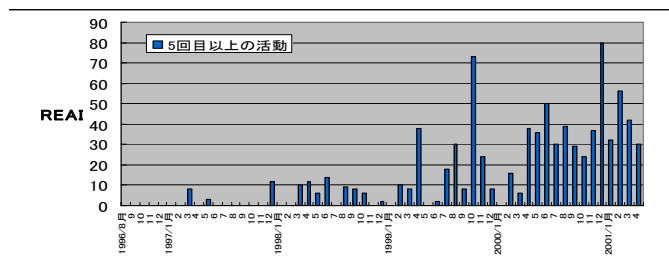


図.3 「繰り返されている活動」についての定量化

4. 「枠組み形成」と「多層 CAPD サイクル」の協働的發展モデルによる分析

智頭町の活動年表と、作成したグラフを基に、智頭町の「ゼロイチ運動」の「枠組み形成」と実際に地域が行う「プロジェクトの実施」について、両者が関連しあって「枠組み」と「プロジェクト」が協働的に発展していく様子をモデル化した。それが図.4 である。今回は特に、地域のプロジェクトの実施を「多層的な CAPD サイクル」と見立ててモデル化した。ここでいう「CAPD サイクル」とは、PDCA サイクルの起点に着目した別称である。地域経営のマネジメントプロセスのような様々な種類の主体が参加するコミュニケーション過程において、まずは一部の主体で現状観察・分析 (Check) から始めて、マネジメントのための場づくり (Action) をしなければいけないことから来ている。

モデルでは行政の支援事業などの「枠組みの形成」と「地域マネジメントの実施」の 2 つの活動軸を想定する。このモデルでは「枠組みの作成」と「地域マネジメントの実施主体づくり」の並進段階が一番の特徴である。枠組みも参加主体も出来あがってしまう前にお互いのマッチングを進めることで、その後の地域によるマネジメント実施が容易になる。いわば「枠組み実施」成功の鍵である。

枠組みが完成したらその枠を地域に当てはめる作業

に移る。ここで上述の並進段階の良し悪しが問われる。既存の枠組みの価値基準の中にいながら革新的で新しい枠組みを採択することは大きな抵抗を生むため、地域にとって非常に困難なことである。そのため、その抵抗を越えてでも採択されるような、取り組みやすかつ魅力的な枠組みであることが必要条件となる。

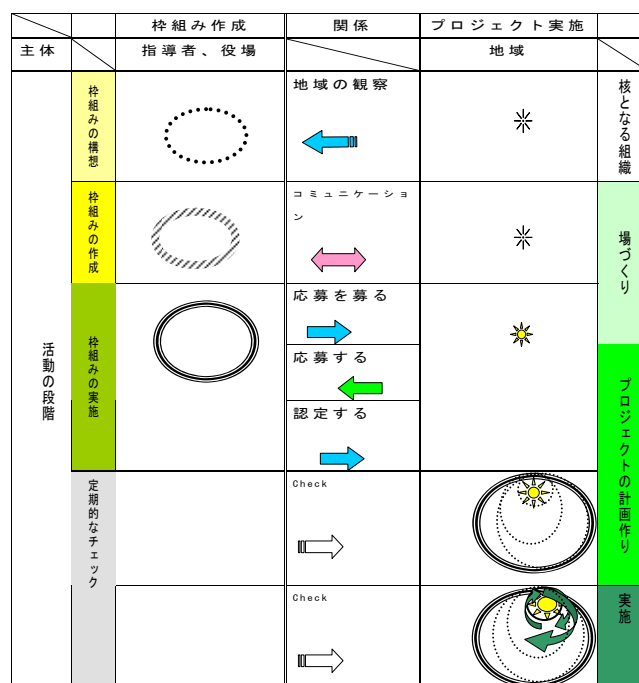


図.4 「枠組み形成」と「多層 CAPD サイクル」の協働的發展モデル

5. おわりに

本研究ではまず、個々の具体的な出来事 (イベント) が地域を活性化する影響度を定量化することを試みた。そのための尺度を提案し、それに基づいて各イベントを時系列的にプロットし、活性化の影響度が変動するパターンを解析する方法を提案した。また補助事業の進展プロセスのダイナミクスを、多層的な CAPD サイクルモデルを用いて記述し、政策論的知見を提示した。これによりプログラムの枠組みが、個別のプロジェクトのスパイラル的成長過程と協働現象を起こし、動的に変動していくと解釈できることを指摘した。

参考文献

- 1) 早瀬集落振興協議会：ふるさととは今 夢ステージ早瀬Ⅲ (自平成九年～平成十八年) 2007
- 2) 鳥取県・智頭町活性化プロジェクト集団：＝平成元年度～平成 10 年度 CCPT 活動実践提言書＝